

Unique &
Exciting

キャリア編

松澤 喜好 (きよし)

1968年電波通信学科 (R) 入学

『英語耳』(シリーズ累計100万部) 著者

1960年代からの行動などが、 54歳(2004年)で『英語耳』出版 につながったこと



1960年代のオーディオ

私が育った時代から始まります。1960年代前半の中学高校で私は放送部員でした。真空管の放送設備を使って78回転(EP)のレコードで校内放送をしていた時代です。中学高校で洋楽に興味を持ち、オープンリールのテープレコーダーにNHKのアンディ・ウイリアムス・シヨニーなどを毎週録音し聞いていました。耳コピで何度もしつこく歌えるまで聞いて真似していたことが、私の英語の基礎になっています。私は引きこもりがちの学生でした。

電通大時代

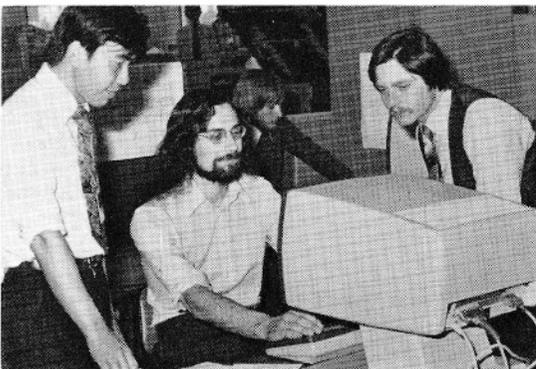
高校の親友が「これからは電気だ!」と言っていたので、電通大に入学しました(笑)。R学科にはモルルス通信の実習があり、最初にブラインドタッチ(見ないで入力)の指導がありました。これが今も役立っています。「ツートット トット トット」がCOISですが「こんなもので通信できるのか?」と疑問に思っていました。しかし3年目には「ツートット」ではなく、いきなり「This is」などと英語が聞こえたのです。脳は慣れることでこんなことができるのだと不思議に思いました。英語の八木先生の授業では、ハムレットの第3独白「To be or not to be...」を暗記しました。のちのペーパーバックの多読につながっています。卒論は、ロシア語の岡本先生が始めたばかりの機械翻訳の扉をたたきました。電通大にはまだコンピューターが無かったので、パンチカードに打ったプログラムを持って他の大学に行き

ました。英文を解析させると翻訳文が複数出たので機械翻訳としては失敗でしたが、英文法を集中して研究した時期です。

通信士の資格を得て船乗りになる道も考えましたが、コンテナ式貨物の進歩により1週間の港の停泊が1泊に短縮されることを知り断念しました。大学の卒業時には洋楽を300曲ほど覚えて歌っていました。覚えた歌詞は私の英会話の言い回しに役立っています。

ソフトウェアのプログラマーになる

1972年に外資系の富士ゼロックスに入社しました。そして1974年には米国と英国のゼロックスに初めて出張させてもらえました。この出張では自分の英語力の不足を思い知らさ



れた反面、目標が見えた気がしました。その翌年には英検1級を取得しました。

1970年代後半には米国ゼロックスが大型複写機にマイクロコンピュータ（インテル8085）を導入していました。

私は1979年から2年間イギリスに駐在して、イギリスチームと共同で日本仕様のソフトを開発するプロジェクトにプログラマーとして参加しました。写真はヒュレット・パッカーD1000の端末の前にいる同僚と私です（1979年）。当時のプログラミングは16進数のアセンブラー言語です。ソースコードには1行ごとに複数行のコメント文が書いてあり、このコメントに助けられました。私は全体のプログラムの要約を英語で書いては同僚にチェックしてもらい、帰国後に日本だけでソフトウェアを変更できるように備えました。

英語漬けの毎日

1980年代には、国産の小型の複写機の製造が始まり、私はゼロからオペレーティング・システム（OS）ごと国産の複写機にプログラムを移植しました。社内の通信環境は米国ゼロックスとの電話回線を社員が無料で使えたので英語で長時間話すことができました。その後、日本からアメリカにも複写機を輸出するようになり、米国と英国に出張する機会もたくさんありました。

1990年代に入ると、社内ベンチャー企業の部門に移り、携帯通訳器の開発に関わりました。1990年代後半には、海外の企業と共同

で音声認識を組み込んだ会話練習機を開発しました。この頃が第2次AIブームです。私は英語音声学を学び、音声波形分析にも詳しくなりました。

2000年代には複合機の開発部門に戻りました。海を越えてネットで印刷を行うようになり、カラー画像を高画質で圧縮する技術など多くの分野で日米の共通化が必要となっていました。私は英語で複数のプロジェクトの日米の橋渡し役としてテレビ会議の司会なども行っていました。

『英語耳』について

2000年頃に英語学習のウェブサイトを個人的に立ち上げました。また東洋大学の非常勤講師として土曜日の2コマを4年間担当しました。会社は兼業を認めてくれたのです。パソコン雑誌ASCIIの編集部に加藤貞顕さんが私のサイトを見たことがきっかけで、2004年に『英語耳』を発売できました。加藤さんは現在3G株式会社の代表取締役CEOであり、『英語耳』の名付け親です。この本はリスニングを目的とした発音入門に加えて英語の習得の道筋を示しています。『英語耳』がヒットしたおかげで、2005年からは社内の英語教育（人事部）と技術系部門の二刀流の仕事を定年退職まで続けることができました。この頃も英語漬けの毎日でした。レンタルビデオ店でDVDを借りて毎週洋画を5本のペースで見っていました。退職後は発音指導と執筆などをして現在に至ります。

累計100万部までに18年が過ぎ、ロングセラーになった

発売から18年後の2022年に『英語耳』のシリーズ累計が100万部を超え、現在もAmazonの売れ筋の上位にいます。また、対面で行っていた『英語耳』の講座を、コロナ禍の2020年からリモートで行うようになりました。AI音声認識（グーグル・ミートの英語字幕）を指導に使い始めてから3年になります。音声認識は、嫌な顔をしないで発音を診断してくれます。ネイティブスピーカーにどのように聞こえているのかわかる点などがシャイな日本人に合っています。現在は音声認識のユーザー側にいますので、興味があればinfo@igoo33.comまでお知らせください。

後輩へのアドバイス

英語の習得は「壮大な慣れ」です。人生のどこかで本格的に英語が必要になったら、何をすべきか迷わないで英語を「聞き取る」ことを目標にしてください。英文を発音しているうちに先が見えてきます。

